

五十嵐三郎先生略歴

一九一一年（明治四四年）四月一日、五十嵐菊治・ウンの三男として北海道旭川市三条通六丁目にて出生。家業は薪炭販売であった。

一九一七年（大正六年）四月（六歳）、旭川市立上川第一尋常小学校に入学。恩師に斎藤善弘・杉村久吉があり、同級生に高野克郎・松田繁・井上弘らがいる。後輩スタルヒンの投球ぶりは忘れられない。

一九二三年（大正一二年）三月（一二歳）、同上卒業。四月、旭川市立北海道旭川商業学校に入学。その後、一九二七年（昭和二年）四月に北海道庁立旭川中学校（現旭川東高等学校）に新入学。現在の生活態度や趣味は、上野成之（美術）・村上久吉（漢文学・文字学）の影響を強く受けており、将来教育の方向へ進もうとする気もちが湧いた。同窓・同級生の鈴木幹雄・近藤寛・鈴木安敏・山下君平らと、勉強・サークル活動を楽しくすごした。スポーツは万能ではないが何でも好きであって、柔道・鉄棒・水泳・陸上競技・絵画に遊んだ。旭中時代に柔道寝技の指導を手島圭二郎・小坂光之介に受け、四高に行ってから小坂に指導を受けた。

一九三二年（昭和七年）三月（二二歳）、同上卒業。遊んでばかりいたので趣味はふえたがその分浪人三年ということになった。

一九三五年（昭和一〇年）四月（二四歳）、進学 of 念断ちがたく、両親を説得して、第四高等学校（金沢市）に入学。旭川生まれの井上靖などの後輩として柔道部で活躍した。時折来る先輩の鈴木大拙の講話を聞き、道元のゆかり大乗寺での参禅。西田幾太郎も先輩ということで、入門書『善の研究』をはじめ彼の著作を読む。お茶に親しむようになったのもこの金沢であった。同窓に浅岡弘文・五十嵐顕・久田栄正・長谷川清喜らがいる。国語国文に志したのは、担任

鴻巣盛広の影響が大きかった。金沢の生活を通して、大樋焼・九谷焼・輪島漆器・加賀友禅など、後の民芸への嗜好に培った。

一九三八年（昭和一三年）三月（二七歳）、同上卒業。四月、東京帝国大学文学部国文学科に入学。恩師橋本進吉との出会いは決定的で、国語学を専攻することになった。当時助手をしていた亀井孝と交わり、その友愛・学芸指導を現在も受けている。

一九四一年（昭和一六年）三月（三〇歳）、同上卒業。四月、母校の北海道庁立旭川中学校教諭となる。同僚に清水長がいて、研鑽しあった。教え子に鈴木真喜男らがいる。同年五月、上川郡永山村出身の島田寿子と結婚。

一九四二年（昭和一七年）五月（三一歳）、長男大誕生。

一九四四年（昭和一九年）七月（三三歳）、長女まどか誕生。

一九四六年（昭和二一年）四月（三五歳）、同じ旭川市内の北海道第三師範学校（現北海道教育大学旭川分校）教授（女子部）となる。

一九四九年（昭和二四年）六月（三八歳）、請われて札幌藤女子専門学校（現藤女子大学）教授となり、居を札幌に移す。（以来、札幌市在住。）

一九五一年（昭和二六年）四月（四〇歳）、北海道大学文学部助教授に転じる。教え子に渡辺英二らがいる。芳賀綏は北大予科生時代以来、国語学の話しに通ってきた。

一九六六年（昭和四一年）十二月（五五歳）、北海道大学文学部教授。

一九七一年（昭和四六年）四月（六〇歳）、北海道大学附属図書館教養分館長を兼任する。

一九七二年（昭和四七年）十一月（六一歳）、北海道の国語教育への貢献および北海道方言の研究により、北海道文化奨励賞（教育部門）を授賞される。

一九七四年（昭和四九年）四月（六三歳）、北海道大学文学部教授・附

属図書館教養分館長を、定年により退官する。ただちに、札幌大学教授（女子短期大学部）に迎えられる。

一九七六年（昭和五一年）七月（六五歳）、札幌大学女子短期大学部長となり、翌年九月までつとめる。

一九八二年（昭和五七年）二月二〇日（七〇歳）、急性肺炎のため入院先の幌南病院で逝去。

五十嵐三郎先生業績・作業目録

著 書

- 1 古典文法要説 北方民生協会 一九五三年九月
- 2 ほっかいどう語 ―その発生と変遷―（監修） 北海道新聞社 一九七〇年六月
- 3 国語概説（共著） 学芸図書 一九七三年四月
- 4 北海道浜ことばの共通語化に関する計量社会言語学的研究（共著） 自家版 一九七七年十一月

国語史・文法に関する論文

- 1 助動詞の研究 国語国文研究第五号 一九五二年三月
- 2 助動詞 続日本文法講座第一巻 明治書院 一九五八年五月
- 3 源氏物語と中古語法 II 助動詞・助詞 講座解釈と文法第三巻 明治書院 一九五九年十一月
- 4 比良坂について 国語国文研究第一五号 一九六〇年二月
- 5 倭片仮字反切義解 群書類従解題 第四九五 第二八輯 一九六一年四月

- 6 比況の助動詞「如し」 助動詞のすべて 国文学（学燈社）第九巻第一三号 一九六四年一〇月
- 7 平安朝文体の一考察 国語国文研究第三〇号 一九六五年三月
- 8 間投助詞「を・ゑ・ろ」 助詞のすべて 国文学（学燈社）第一二巻第二号 一九六七年一月
- 9 平安朝文体の一考察 第二 国語国文研究第三六号 一九六七年二月
- 10 共通語の発生と文学 日本文学（日文協会）第二一巻第一号 一九七二年十一月

方言に関する調査研究

- 1 地方言語の敬語に関する調査（札幌を中心に） 国立国語研究所年報五 一九五三年度
- 2 全国方言の概観調査 国立国語研究所年報六 一九五四年度
- 3 方言地図作成のための準備研究 第一年目 国立国語研究所年報七 一九五五年度
- 4 同上 第二年目 国立国語研究所年報八 一九五六年度
- 5 全国言語地図作成のための調査 第一年目（稚内、三石、江別、伊達、月形） 国立国語研究所年報九 一九五七年度
- 6 同上 第二年目（札幌、石狩、銭函、浦河、永山） 国立国語研究所年報一〇 一九五八年度
- 7 北海道の言語の実態と共通語化の過程 科学研究費（総合研究）共同研究 第一年目 国立国語研究所年報一〇 一九五八年度
- 8 全国言語地図作成のための調査 第三年目（増毛、苫小牧、新十津川、栗山） 国立国語研究所年報一一 一九五九年度
- 9 北海道の言語の実態と共通語化の過程 科学研究費（総合研究）共同研究 第二年目 国立国語研究所年報一一 一九五九年度